歴史人口学からみた生と死　十二（最終回）

鬼頭　宏

十　歴史と現代

（一）

一年間続けさせていただいた連載も、いよいよ最終回になった。今回は、出生から死にいたるまでの人口現象にかかわることわざをみることによって、幕を閉じることにしよう。ことわざは、長い時間をかけて形づくられた庶民の知恵の結晶である。いま言い慣わしていることわざの大部分は、いつ、だれによって生み出されたかは定かでないが、江戸時代、あるいはそれ以前までさかのぼると思われる。社会が大きく変動した第二次大戦の直後まで、その多くは実感のこもった、生き生きしたことばであったろう。この連載でとりあげた江戸時代の人々が、出生、結婚、死をどのように見つめていたのかを、ことわざを通して考えることにしたい（折井英治編『暮らしの中のことわざ辞典』第二版集英社に依拠した）。

万の倉より子は宝

現代には、子どもの将来に不安を抱き、出産を控える若い夫婦

が増えてきたが、かつては子を望まぬ親はまずなかった。「千の倉より子は宝」「子に過ぎたる宝なし」「持つべきものは子」「子供とふぐりは荷にならぬ」と、子を持つべきこと、子を持つことの幸せを説くことわざは数多い。

現代日本人の理想の子ども数は、二人ないし三人に集中しているが、ことわざの世界ではどうだろうか。「子三人子宝」「三人子持は笑うて暮す」「多し少し子三人」「足らず余らず子三人」「負わず借らずに子三人」「死なぬ子三人皆孝行」は理想であった。乳児死亡率が高かった江戸時代には、「減らぬものなら金百両、死なぬものなら子は一人」「思うようなら子と三人」と願っても、「死んだ子の年勘定」の悲しみを味わわないようにするためには、平均五、六回の出産はどうしても必要だった。「一姫二太郎」のことわざも、生まれる子ははじめが女で次が男が育てやすいとの経験から生まれたものだろう。

世の中はうまくいかない。「子煩悩に子なし」「長者に子無し」かと思うと、一方には「貧乏人の子沢山」「律義者の子沢山」「十を頭に十一人」という多産の夫婦もある。「無い子では泣かれぬ」とはいうものの、「有っても苦労、無くても苦労」。「無い子では泣かで有る子で泣く」「子がなくて泣くは芋掘りばかり」ということにもなって、「子は三界の首枷」と厄介もの扱いまでされてしまう。

なにしろ胎内にいるうちから「子持二人扶持」「子持ちの腹には宿無しが居る」のだし、生まれてくれば「乳を飲むこと百八十石」で、まさに「子宝脛が細る」思いをし、「子を持てば七十五度泣く」ことになる。泣かされるのは経済的にばかりではない。「太閤様でも子守は嫌」だそうだ。「泣く子は育つ」「赤子は泣き泣き育つ」あるいは「泣く子は利口」というけれど、「寝る子は育つ親助け」「寝る子は息災」というのが実感だろう。

それでも「我が子自慢は親の常」、「老いての幸い」を夢見て「這えば立て、立てば歩めの親心」である。「子にひかるる親心」だから「子故の闇に迷う」こともある。「馬鹿を見たくば親を見よ」とさえ言われかねない。「下手な子を持ちゃ火事よりこわい」のはわかっていても、「馬鹿でも総領、欠けても大椀」「馬鹿な子ほど可愛い」のである。「子を棄てる藪はあるが、身を棄てる藪はない」のが人情なら、「棄てるも軒の下」もまた人情である。

幼い子を可愛がるのは、父母以上に祖父母である。「子より孫が可愛」「孫の可愛いのと向う脹の痛いのはこらえられぬ」という。それこそ「憎い嫁から可愛い孫が生まれる」心境で「馬鹿の孫ほめ」になってしまうけれど、「孫飼わんより犬の子飼え」のことわざもある。念のため。

泣いて育てて笑うてかかれ

生まれた子の人格が幼いころにつくられることを、「三つ子の魂百まで」「七夜（または産屋）の風邪は一生つく」などのことわざが説いている。「子供は大人の父親」「子を視ること親に如かず」とさえいわれるから、親たるもの子育てには細心の注意を払い「泣いて育てて笑うてかかれ」「子供は教え殺せ、馬は飼い殺せ」の姿勢でなくてはならない。

「親と子供は銭かねで買われぬ」大切な存在ではあるが、親は子を、子は親を選ぶことは許されない。「大名の一人子」「長者の子は節句知らず」と、生まれた時から何不自由なく育てられる子もいれば、「子供は貧乏人の財産」「餓鬼も人数」とばかりに頼りにされたり、なぐさめられる親もある。また「一人子は国（世）に憚かる」とか「後家育ちは三百安い」「祖母育ちは銭が安い」「年寄の子は影なし」といわれても、子どもに責任はない。子をとりまく環境はさまざまだが、「親はなくとも子は育つ」「生みの親より育ての親」で、どんな子も「三年たてば三つになる」のである。

わが国では長いあいだ、子どもは可愛いものの代表であった。乳幼児期の生存が不確かだったこともあって「七つまでは神のうち」というふうに、子どもをみる習慣が生まれたのだろう。しかし七歳にいたると「七つ七里に憎まれる」存在になり、「八つ子も疳癪」とばかりに、ようやくそれ相応の存在が認められるようになる。

出産期から養育期へとライフ・サイクルのステージが進む頃、親の苦労はいっそう大きくなる。経済的にも「惣領の十五は貧乏の峠（世盛り）」「総領子の十五の時は囲炉裏の灰も溜らない」ほどである。さらに思春期を迎えた「ニキビ男と雀斑女」は「破物と小娘」のたとえのように扱いにくいことこの上ない。当人たちはもちろん、親にとっても「二・八余り（すなわち十六、七歳）は人の瀬越し」なのである。せっかくここまで育てても、「親の心、子知らず」「子で子にならぬ杜鵑」では、「憎まれっ子世にはばかる（出る）」「憎まれっ子頭堅し」となぐさめられても、親の立つ瀬はないというべきだろう。

（二）

縁は異なもの

子女が成長して「鬼も十八、番茶も出花」「南瓜女も一盛り」ともなると、結婚が間近な問題となってくる。男でも「二十五が

済みゃ入日に向かう」というし、「二人口には過ぎるが一人口は過ごせない」というから、早いうちに相手を見つけなければならない。「出雲の神の縁結び」「合縁奇縁」ではあるけれど、現代とは異なって、本人さえよければよしというわけにはいかない。結婚は労働力の交換とか子孫の維持など、個人よりも家にとって重大な意味をもっていたからである。

「縁あれば千里」「東男に京女」などの言いまわしはあっても、農民の現実の婚姻圏が案外狭かったのは、互いの家の協力のためにはよく知り合った間柄であることが必要だったためである。だから「長者の娘も乞うて見よ」とか「恋に上下の隔て無し」は、励ましにはなっても現実的ではなかった。長い結婚生活を考えれば、やはり身分、家柄を見きわめて「婿は座敷から貰え、嫁は庭から貰え」を守るべきなのである。「庭」のほかに台所、灰小屋、流し下、掃溜など表現は多様であるが、妻の家よりも夫の方が優位であった方がうまくいくと考えられていたのだろう。

結婚への道は本人にとっても親にとってもなかなかけわしい。「娘一人に婿八人」ともなると、「一人娘と春の日はくれそうでくれぬ」ことになる。そうなったら「一押二金三男」しかない。もっとも娘を嫁がせる側にも事情があるから、なるべく有利に事を運ぼうとする。養蚕などで女子労働力需要が大きい地方では「娘三人は一身代」であったが、なにしろ「小袋と小娘は思ったより入りが多い」のたとえどおり、「娘三人持てば身代潰す」「娘の子は強盗八人」、あげ句のはてには「盗人も五女の家には入らない」とさえいわれるほどである。好ましい嫁ぎ先を見つけても「娘出世、親貧乏」になりかねなかった。反対に、「婿三代続けば金持ちになる」「婿取り三代身上」と言う。もっとも、「婿取り天上無し」だそうだから、男たるもの「粉糠三合あったら婿に行くな」といましめられた。

夫婦の年齢差についてもよしあしがある。「七つ泣き別れ」と七歳違いは好まれなかった。現代の夫婦は三歳差が平均だが、江戸時代にはもっと大きかったようである。好まれたのは一歳違いで「一つ劣りは鉄の草鞋で探せ」とまでいわれる。また「姉女房は身代の薬」「一つ増しは果報持ち」「箆増しは果報持ち」など、姉さん女房がよいとすることわざも多い。ただし、男女の平均余命が接近していた江戸時代には、現代とは異なって、夫よりも妻が先立つ可能性を高めることになる。

女房は家の大黒柱

夫にとって妻は偉大である。「家に無くてならぬものは上り框と女房」であり、「女房は家の固め」「男は妻（め）から」だった

から、まさに「女房は半身上」。それゆえに「女房の悪いは六十年（百年）の不作」と言われ、結婚にあたっては「嫁を貰えば親を貰え」「娘を見るより母を見よ」と、よくよく相手を選ばなければならない。

こうして「似合う夫婦は鍋の蓋」「似た者夫婦」が誕生し、いつまでも「女房十八、われ二十」の気持ちでいられれば幸せというものである。ところが「女房と米の飯には飽かぬ」とか「女房と味噌は古いほどよい」とは口先ばかりのようで、新鮮な気分でいられるのも「女房百日、馬二十日」ならまだしも、「牛馬三十日、嬶二十日」となると少々ひどい。いずれにしても「女房と畳は新しい方がよい」「女房と茄子は若い方がよい」が夫の本音らしい。

「子はかすがい」「縁の切れ目は子でつなぐ」と互いにがまんしていても、もともと「夫婦は合せ離れもの」「均合わぬは不縁の基」で、「縁と命は繋がれぬ」「のけば他人」になってしまう。

離死別後の妻は強かったのだろうか、「女房は一人でも食える」「女やもめに花が咲く」などという。「二十（十八）後家は立つが、三十（四十）後家は立たぬ」ともいわれるが、事実は逆で、三〇歳以上で離死別した女性の再婚率が三〇前よりずっと低下することは、すでに見たとおりである。一方、「女房と米の飯は行く先にあり」と強がっていた男の方は、「女房は変える程悪くなる」のが実情のようだ。

（三）

嫁と姑、犬と猿

跡取りの結婚によって世帯の構成が変化すると、家族関係に微妙なきしみが生じる。嫁と姑の関係はそのさいたるものだろう。嫁いできた当初こそ、珍しがられ、大事に扱われもしようが、「嫁の三日ぼめ」「嫁と姑七十五日」なのである。「八月柴は嫁に焚かすな」とかばってくれることもあろうが、そのようなことは例外で、むしろ「夏の火は嫁に焚かせ」とばかりに、きつい仕事は嫁へと回ってくる。里帰りとなれば「嫁の朝立ち、娘の夕立ち」がいつわらざる心情だろう。「兄弟は他人の始まり」だから、ましてや嫁にとって「小姑は鬼千匹」、さらに「姑無ければ村姑」だったからまったく気が抜けない。

しかし年が経ち、主婦権が嫁に移る頃には、力関係が入れ替わってしまう。「姑の場塞り」「麦と姑は踏むがよい」と年老いた姑は出る幕がない。跡取りに嫁が来れば「昨日は嫁、今日は姑」

「娘が姑になる」わけで、「姑に似た嫁」は「姑の仇を嫁が討つ」ことになる。「姑の十七見た者がない」のだから仕方がない。現代老人の悲劇には、核家族化によってそれをできなくなった点が加えられるべきだろう。

代が変われば世が変わる

六〇歳を過ぎる頃、世帯主の交代が行なわれる。跡取りは三十代、まさに「三十は男の花」である。結婚して子も生まれ、「妻(め)いとしの子いとし」で親の影も薄れがち。「子を持って知る親の恩」といっても、結婚後十年ほど経ってそれがわかってくる頃には親はすでにない。まさに「孝行のしたい時分に親はなし」である。

「三十九じゃもの、花じゃもの」「人の意見は四十まで」と、代変わりとともに人生の盛りが訪れるが、「人生僅か五十年」「人生一生二万日」の時代、出生時の余命はもっと短かかったのだから老化も早い。「四十がったり」「四十くらがり」と体力も衰えをみせる。

「年が薬」「年取れば利口になる」「年寄は家の宝」「年寄の言うことと牛のしりがいは外れない」とおだてられても、実は「年寄と古籠は使い得」とばかりに、たいしてあてにされているわけではない。むしろ「年寄の言うことと牛の尻かせに直いのはない」と皮肉られ、「年寄と仏壇は置きどころがない」「年寄と釘頭は引っ込むがよし」と敬遠されるばかりである。「長生きは恥多し」「年には勝てぬ」「年は寄るまいもの」と弱音を吐き、嘆いたところではじまらない。「老いて再び稚児になる」「七十の三つ子」というから、いっそ「老いては子に従え」を守るほうがよさそうだ。

老人が居づらいのは、どうも高齢化社会の現代ばかりとは言えないようである。「どうせ生ある者は死あり」ならば、寝たきり老人になるよりは「死なば卒中」という悲しい願いにいたるのだろう。とは言っても、「命あっての物種」「命に過ぎる宝なし」だからこそ、「亀の年を鶴が羨む」のだし、その亀も「亀も上うえ」とばかりに長命をのぞむのである。それが人情というものだろう。

(四)

ことわざは、時にはいましめ、批判、あてこすりの痛烈な道具とされ、時にはやんわりと慰めや希望を与えてくれる。だから同じことに対して、肯定、否定の両方の立場から、矛盾する表現がいくらでもでてくるのである。そのようなことわざを、江戸時代

人口史の事実にそくして配列してみたのだが、いかがだろうか。

さて、近年の出生率の低下は著しく、すでに保育園・幼稚園には園児の減少として影響が現われている。昨年は戦後、したがっておそらく史上最低の水準へと出生率は低下したが、今年になってから、産業界からも将来の労働力不足や経済活力の減退を心配して、出生力の向上をはかるべきだとの声があがるようになってきた。ほんの少し前と、まるで様変わりしたことに驚く外ない。昭和四十九年は国連世界人口年だったが、石油危機直後のこの年に出た『日本人口の動向』（人口白書）でも、同年の「第一回日本人口会議」の大会宣言においても、「子どもは二人まで」の国民的合意を実現して、なるべく早く「静止人口（人口ゼロ成長）」をめざせとの提案が出されているのである。

出生率の増減は循環的に変化するという説もあり、現に、毎日新聞社人口問題調査会が今年五月に実施した「第十六回全国家族計画世論調査」の結果でも、理想子ども数の三人志向が増えて、少産傾向に歯止めがかかったとされる（毎日新聞八月十二日朝刊）。また子育てや親の扶養などに関しても「価値観のUターン現象」が見られるとしている。

日本型の少産少死社会が実現しつつあるとみられないだろうか。まだ決定的な予測はできないものの、僅か数年の間に大きく揺れ動く一部の声とは無関係に、日本の家族は着実に方向を見出しているのである。江戸時代後半は人口学的にひとつの均衡状態を達成した時代である。これからの日本社会も次元は異なるが、核家族化を達成し、人口成長率もゼロに近い、新しい均衡状態に入ることになる。その時を迎えようとしている今、一年にわたって紹介した江戸時代後半の人口史が、何らかのお役に立てば幸いである。

＝了＝

（上智大学）

＊

〔著者紹介〕一九四七年三月二日、東京に生れる。中学校から大学院まで慶応で学ぶ。専門は、日本経済史、人口史の研究。中学時代、朝日新聞に連載された「柳翁十話」に魅され、大事に切り抜いた頃より民俗学に興味をもつ。経済学部に進んでも、速水ゼミに入り、一味ちがった専門を選ぶ。大学時代は、児童文化研究会に所属し、人形劇や影絵、子供会のサークル活動を続けた。ただ今、二男の父。